

## ニュースレター Vol.12

2025年 12月発行

# 公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金

## ご寄付くださいました皆さまへ

平素は、公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金に温かなご寄付をいただいておりますこと、厚くお礼申し上げます。

今秋、大いに盛り上がった中で終了しました大阪・関西万博、そしてノーベル賞の話題など、いのちや未来社会について深く考える機会となったのではないかと存じます。皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

私どもは、宇温(たかはる)が遺した「人からもらった幸せを その人だけじゃなく 他の人にも幸せをつなぐ」という言葉を礎に 2019年に基金を設立して以来、たくさんの方からご賛同いただき、ご寄付くださいましたことで、助成活動を続けることができいております。今回も基金の活動をご報告させてもらえますことは、これもひとえに皆さまからの温かなお心の賜として、深く感謝申し上げます。

## 助成活動と助成先からのメッセージ

皆さまからいただきましたご寄付につきまして、宇温が沖縄での学生時代にかかわりをもっていました特定非営利活動法人 アメラジアンスクール・イン・オキナワさん、および、一般社団法人 大学コンソーシアム沖縄 子どもの居場所学生ボランティアセンターさんに助成し、活用いただいております。

アメラジアンスクール・イン・オキナワさんでは、最近生徒数が急速に増えているとのことで、教育活動の充実につながるネット環境の整備や教材の購入などに助成金を活用され、子どもたちの教育に役立ててくださっています。スクールさんからの報告を別紙1に紹介いたします。

子どもの居場所学生ボランティアセンターさんでは、沖縄県内の離島への学生ボランティアの派遣において、従来以上に派遣地区を拡充されたことにも助成金を活用くださいました。派遣された学生の方々から派遣先での多くの学びや気づきを別紙2に掲載いたしました。

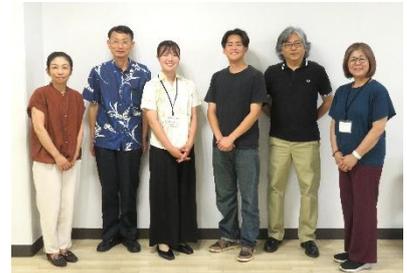
9月には、基金事務局が助成先を訪問し、助成の具体的な活用や活動報告を紹介いただくと共に今後に向けての基金への要望などについて、幅広く意見交換をさせていただきました。



アメラジアンスクール・イン・オキナワさん訪問



子どもの居場所学生ボランティアセンターさん訪問



助成先の皆さま、訪問に関しまして、お忙しいところ、お時間をとってくださりましてありがとうございました。

## 今後に向けて

気候変動やエネルギー、世界の民族の分断、経済や物価などの社会問題、AI や宇宙・ロボットをはじめとするテクノロジーの進歩で先の見通しが読めない中で、これからの将来を担う子どもたちや若い世代の方々、そして、助成先の皆さまが、未来を見据え高い志をもって活動されています。基金としましては、宇温が遺した「人からもらった幸せをその人だけじゃなく 他の人にも幸せをつなぐ」の思いを噛みしめ、これからも地道な活動を続けてまいりたいと存じます。

今後におきましても皆さまから公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金への温かなご支援とご協力を賜りますこと、何卒よろしくお願い申し上げます。

### <Facebook ページ>

琉球宇温基金では、Facebook のページを立ち上げております。

下記 URL、または、Facebook の「琉球宇温基金」を検索してご覧いただくことができます。

<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>

以 上

## (別紙 1) アメラジアンスクール・イン・オキナワさんからいただきましたレポート

日頃よりアメラジアンスクール・イン・オキナワを支えていただき、心より感謝いたします。

貴基金による支援は、本校の教育環境の整備や教育活動の充実に欠かせない助成金となっております。本校は、宜野湾市の施設（人材育成交流センターめぶき）の1階を使用して運営しています。ここ数年で生徒数が増え、教室不足が大きな課題となっております。その教室不足を補うため、隣接している施設（男女共同参画センターふくふく）の多目的室や講堂を借用しながら授業を行っております。しかし、その多目的室や講堂はネット環境が不十分のため、プロジェクターやクロムブックを使用する授業ができませんでした。そこで、対応策としてWi-Fiを設置しネット環境を整備する計画をしました。この度、貴基金からの助成金により、念願のWi-Fiを設置することができました。また、助成金の一部は教材費としても活用しましたことをご報告いたします。

貴基金の助成金を活用して設置したWi-Fiにより、ネット環境が格段に上がり、プロジェクターやクロムブックを活用する授業が日常的に実施できるようになりました。お陰様で、教師の学習指導にかかる負担軽減や授業改善に大変役立っています。また、児童生徒にとっても、どの教室でも通信機器が使える学習環境になったことで、授業における集中力や理解力の向上に繋がっています。最後に、長年の貴基金による本校への支援は、学習環境や学習教材教具の改善・充実に確実に推進する貴重な財源となっております。今後とも本校教育活動へのご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

アメラジアンスクール・イン・オキナワ 校長 比嘉政宏



創立27周年を迎えました。大きなケーキを前に皆でパチリ！

## **（別紙 2）子どもの居場所学生ボランティアセンターさんからいただきましたレポート**

子どもの居場所学生ボランティアセンターでは、内閣府が主導する「沖縄こどもの貧困緊急対策事業」の一環で沖縄県から委託を受け、大学コンソーシアム沖縄に加盟している 11 の高等教育機関の現役学生を、県内のこどもの居場所へボランティアとして派遣しています。そのような派遣は、他県よりも深刻と指摘されている沖縄のこどもの貧困問題という地域課題解決を目的に実施しています。学生ボランティアとの関わりを通して、居場所へ通う子どもたちの精神的安定や学習意欲の向上がもたらされ、将来への夢を具体的に描くことができるようになるなどの効果の報告がなされております。令和 7 年度に当事業は 10 年目を迎えておりますが、9 月末時点では、260 名の学生が登録し、そのうち 205 名が活動をしました。

琉球宇温基金を活用させていただいている離島派遣事業では、今年度夏季（8 月中旬～9 月中旬実施）に 26 名の学生を 10 島 18 ヶ所の居場所へ派遣することができました。今回の派遣でも、申込のあったすべての学生を離島の居場所とマッチングし、また受け入れの希望をいただいたすべての居場所へ派遣することができました。これもひとえに琉球宇温基金様をはじめ、ご支援を下さっている企業・団体様・個人様の力添えによります。ここに、改めて深甚なる謝意を表します。

今季の派遣より、竹富町の 3 島（小浜島、波照間島、西表島）へ新規派遣を行い、地区を拡充して、離島のこどもたちへの支援の更なる充実につなげています。以下、令和 7 年度夏季（R7.8 月中旬～9 月中旬に実施の活動）から、学生の活動報告を抜粋してご紹介します。

### **◆子ども達の居場所ていだぬふぁ・ウルズ子どもホッ!とステーション（石垣島） / 沖縄国際大学 3 年次 石川 空飛**

普段の定期活動と違う、はじめての居場所での活動だったので、不安と緊張でいっぱいでしたが、短時間で子ども達と打ち解けることができましたと思います。子どもたちと近くの神社に行き、掃き掃除をして、居場所の敷地内でかけっこを何回もやって、疲れたら休憩して、またかけっこをした後に、はじめて紙芝居をさせてもらい、感情を込めながら読むことが難しかったです。

最終日は、農園に行き、草むしりや地域の方々と交流をして、居場所さん所有の畑を綺麗にしました。その後は、お待ちかねの動物と触れ合い、パン食い競争とお菓子食い競争をしました。そして、落ち着いた時に、かき氷を皆でかき込みました。短い間で沢山の“はじめて”を体験させてもらい、あっという間に過ぎ去った石垣島の子どもたちとの時間は本当にかけがえのないものとなり、しっかりと身に染みて体験させていただきました。いつか、また逢える日を楽しみにして、ここで得た経験を最大限に活用していきたいと思います。



### **◆子どもホッ!とステーション・子どもホッ!とステーション未来塾（石垣島） / 琉球大学 1 年次 日當 榮輔**

私がお名前は何と？と話しかけても「教えたくない」と言われてしまったほか、自分なりに優しい言葉遣いや語彙で話しかけても理解してもらえないことがあり、子どもたちとコミュニケーションをとることを辛いと感じることがあった。そのことを支援員の皆さんに相談してみると、彼らが育った環境についてのお話があり、そのなかで「子どもたちは被害者だ」と言われたことが印象に残った。子どものうちに必要な教育を受けられず、政府による給付などの金銭的支援も子どもに還元されない、家庭を取り巻く課題を知ってから、子どもの奔放な行いを少しずつ許容し、子どもたちに振り回されながらも向き合うことができるようになった。子どもたちを取り残さず支える活動の重要性を、ボランティアを通して学んだ。



### **◆エンカレッジデイゴ学習支援教室・漲水学園学習塾（宮古島） / 琉球大学 2 年次 喜屋武 美妃**

居場所には、宮古島の歴史についてとても興味を持って話してくれる子がいました。元々その子はほとんど話さなかったそうですが、今では興味があることは話してくれるようになったそうです。この居場所に通うようになり、安定した人間関係の中で自分の感情や考えを受け止

めてもらえる経験が増えることで、精神面が発達したと考えられます。また定期的に保護者と話して家庭の状況を把握し、保護者とも良好な関係性を築けるように、連携も丁寧に行っているそうです。また、受験を控えた中学生の日本語が苦手な外国籍の子に数学と理科を教えました。理解しているのか分からない場面もあり難しいと感じましたが、どうやったら分かってもらえるだろうと真剣に考えて、出来るだけ分かりやすく楽しい授業になるように工夫しました。

色々な特性の子と関わる中で、その子が「何を感じているのか」「何に反応しているのか」を考えて、静かに観察する姿勢が大切だと居場所の管理者から学びました。言葉のやり取りだけでなく、視線や距離感、動作などから関係性を作るそうです。一人一人と向き合い、個性や状況に合わせた支援をしている姿勢が印象的でした。



#### ◆学習支援教室まなびやあ（宮古島） / 琉球大学3年次 長元 あいり

居場所にいる子ども達複数人で食事を共にする、孤食をさせない“共食”に重きを置いており、私も子ども達と楽しく会話しながら食事をいただきました。最初は人見知りをしていていた女の子がいましたが、複数人で会話をしながら食事を進めるうちに、「～ちゃんはどう？」と問いかけると、嬉しそうに会話に加わってくれました。最後には、女の子の方から「ねえねえ、先生って普段どうやって寝るの？」と話しかけてくれたことが、特に印象に残っています。また、私自身が大学生ということもあり、普段大学生と接する機会が少ない子ども達にとっては、少なからず緊張があったのではないかと思います。そこで、カードゲームなどの遊びを通して私から積極的に話しかけ、自然に打ち解けられるよう心掛けました。子ども達一人ひとりの性格を“個性”として受け入れ、時間の経過とともに人見知りしていた子が心を開いてくれたことは、私にとって心温まる経験となりました。



#### ◆サシバ教室（宮古島） / 沖縄キリスト教伝道大学1年次 松村 和泉

思い通りに行かないと30分くらい不貞腐れて、話を聞いてくれなくなった女の子がいました。自分もその時にどうしたら良いか分からずに沢山悩みましたが、一緒にいた男の子が「僕が見とくよ！」と言ってくれたり、その女の子の普段の様子を話してくれて、とても助けられました。時間が経ち、気づくと女の子の機嫌も戻っていました。その男の子は、賢く大人しい子でしたが、その子のタイピングを沢山褒めたり、一緒になって自分も教わったりしていくうちに、壁がいつの間にか無くなり、好きな事を沢山話してくれて、遊ぶ時にずっとついてくるようなとても可愛い子でした。お兄ちゃん気質もあり、周りをよく見ていて、小学生でまだ小さいのにともしっかりしていました。後からサシバ教室の先生に聞くと、居場所に通い始めのころ、この子はよく問題を起こしたり泣いたりする事があったそうです。サシバ教室で活動して感じた事は、学童とは違って、子ども達が心を開いてくれるまで時間がかかることや、最初は必ず壁を作る事です。最初から思いっきり飛び乗ってきたりする子や、わがままを言って自分を全開に出す子が少ない感じがしました。けれども時間が経ち、心を開いてくると、沢山自分の話をしたりわがままを言って、少し反抗するようになり、子どもから「一緒に遊ぼう」と誘ってくれるようになって、本当に可愛いかったです。



#### ◆さんご学習支援教室（伊良部島） / 沖縄工業高等専門学校5年次 當間 一代

伊良部島で出会った小学生・中学生は、元気で明るく、声も大きく、仲の良さが印象的であった。日常の些細な出来事にも笑顔で楽しそうに過ごしている姿が多く見られた。特に印象的であったのは、多くの子もたちが自分の夢や将来になりたい職業を明確に持ち、それを堂々と語る事ができていた点である。

元気さや声の大きさは、漁師家庭や親戚の影響を受けていることが多いとのことであった。また、仲の良さは都市部と比べて人口が少なく、集落ごとの親戚付き合いや近所付き合いが密接であることが関係していると考えられる。

#### ◆SUNNY キッズクラブ（伊平屋島） / 名桜大学 3 年次 中津 美桜乃

経済状況等から子どもたちの支援への有無を決定してしまうと、離島という小さな範囲の特性から格差が目立ったり、子どもたちの間で支援への噂やいじめの発端になってしまったりすることがあると聞きました。そのため、伊平屋島では希望する子どもたち全員が居場所に参加できるようにしており、実際ほとんどが参加しているとのことでした。子どもだけでなく地域全体の特性によって支援を柔軟に変えることの大切さや、子ども間における人間関係にも配慮する必要性を学びました。本活動を通して、子どもの視点からの地域活性化を考えて地域研究をしようと強く感じました。また同時に、地元に戻っても子ども支援を続けて新たな学びを得て貢献をしていきたいと思えます。



#### ◆伊是名村立保育所・放課後ふれあいキッズ（伊是名島） / 沖縄県立芸術大学 1 年次齋藤 るん

離島であることは、先生が児童の親までを把握している状態を作り児童の普段の生活のことまで情報共有がなされやすい様子だった。これは児童一人ひとりに合わせた柔軟な指導にも繋がるのだと思う。ただ、彼らは幼少期からほとんど変わらないメンバーで小中学校と上がっていくことになり、家族兄弟のような様子も見られた。子どもたち同士の関係性には、対等な部分がある様子だった。例えば体温測定を手伝う児童がいた際に、自分の遊びさえ滞りなく行えていけば同級生が当てる体温計にも、抵抗なく反応しているようだった。お互いに何かをする、されるということが、上下関係につながっておらず、喧嘩も優劣を生まない一過性のものだった。ただ一方で新しい関係性を築く機会はやはり少ないと思われ、積極的な交流活動も必要だと感じた。



#### ◆南大東村立学習支援センター（南大東島） / 琉球大学 3 年次 上里 将大朗

現地で出会った方々との会話の中で心に残ったのは「結果ではなく過程が大事」という言葉だ。誰もが失敗や挫折を経験するが、それがあって今の自分がある。子どもたちの教科書に載っていた「寒翁が馬（さいおうがうま）」の話の思い出し、良いことも悪いことも巡り巡って意味を持つのだと感じた。特に島の大人たちが、子どもたちの未来のためにどう島を良くしていくのか真剣に語る姿は、自分の生き方や仕事観を考える大きなきっかけとなった。子どもたちの太鼓や部活の練習を見たとき、彼らの全力で取り組む姿に心を打たれた。小さな島でも夢を持ち、真剣に取り組む姿は、場所や環境が人を制御するのではなく、本人の気持ち次第で未来が広がることを教えてくれた。私自身も、自分の可能性を狭めず、なりたい姿を想像して努力を続けたいと思う。



#### ◆アニー塾（粟国島） / 沖縄大学 2 年次 石川 歩楓

中学 3 年生がプレ入試に挑戦していて、私は見守りが中心だった。塾の先生と生徒はとても距離が近く、勉強するときは集中し、休憩中は楽しそうに会話していて、島ならではの温かい雰囲気を感じた。算数の「かさの比」の問題を聞かれたときは、自分もうまく説明できず悔しかった。英語や数学について質問されたときもあいまいな答えになってしまい、自分の勉強不足を実感した。ただ、子どもたちは間違った問題を振り返って解き直す習慣があり、その真剣な姿に学ぶことが多かった。中学 1 年生の子が分からないところを確認しつつ、自分で復習していた姿も印象に残っている。

今回の活動では、子どもたちの素直さや学ぶ意欲にたくさん刺激をもらった。同時に、自分が十分に答えられない場面もあって悔しさもあったが、それも含めて「もっと勉強しよう」と思えるきっかけになった。子どもたちは仲間と励まし合いながら学びを深めていて、その姿から学習は人との関わりの中で育つものだと改めて感じた。粟国島での三日間は私にとって大切な経験になったし、また勉強を重ねて、子どもたちの支援に行きたい。



#### ◆ちゅらさん子育て支援センター（小浜島） / 琉球大学 4 年次 島袋 真理

印象的であったのは、子ども達がしっかりと意思表示ができるという点です。嫌なことや不快に思ったことがあれば相手の子に対して「やめて」と伝えることができていました。活動期間中に居場所の方が「今のは痛かったんじゃない？」と、子ども達の気持ちを確認する場面が何度もあり、子どもの遊びとしてその場を流すのではなく、大人が子ども達一人ひとりしっかりと向き合う環境があるからこそ、子ども達も安心して意思表示をすることができるのだと感じました。小浜島では居場所の職員の方々や地域の方々子ども達を気にかけており、地域で子育てをしている島という印象を受け、小浜島のこのような環境や文化は本当にかけがえのないものであると感じました。大学生のお兄さんとして、子ども達により影響を与えられるようにという心構えで臨み、子ども達からも多くのことを教えてもらいました。



#### ◆やまねこ子育て支援センター（西表島） / 琉球大学 2 年次 田淵 雅文

「げんべいやろう」と勧誘を受けた。参加してみるものの、何も説明されないまま自分に向かってあちこちからボールが飛んできてすぐにアウトになってしまった。アウトになった人は外野に行くルールだったので、入って早々外野にだされることになったため、なんとなく寂しい気持ちになった。多分ここで寂しくなったのは、私という「個人」を見て遊びに勧誘したのではなく、ルール内で子どもが勝者になるための敗者役として登場させられ、自分のことを代替が効く存在だと感じてしまったからである。次は人生ゲームをした。とはいえずっと銀行役をしていた。所持金を全て千円札化して、千円札の扇を作って仰いざと思ったら、今度は全て十萬円札に交換することを要求したり、という感じだ。両替作業中は自分のターンはどンドン飛ばされるので明らかに自分のコマだけ進行がおそかった。二日間とも児童のペースに呑まれていたと感じる。自分のペースを保ち続ける方法を考えて出た解決方法は、自分の感情をある程度素直に表現して、作り笑顔を頻発しないことである。この考えを頭の片隅に置きながら児童と接することでずいぶん楽しい時間になったし、疲れにくくなった。



#### ◆バスマ子育て支援センター（波照間島） / 琉球大学 4 年次 佐事 妃菜

子どもたちは人見知りせず積極的に話しかけてくれ、短期間ながら温かな関係を築くことができた。島という小規模な環境では保護者だけでなく地域全員が身近な存在であり、年が離れていてもみな兄弟のような関係が当たり前で、それが子どもたちの安心感や積極性につながっていると感じた。地域の繋がり方が子どもの成長に果たす役割を改めて実感できたことも今回の離島派遣で得た大きな学びである。今回の活動を終えて、子どもは地域の縮図だと強く感じた。子どもたちが芯を持って伸び伸び過ごしている様子から地域のあたたかさや重要性も実感できた。さらに、祖父母が暮らす自分にとっても思い入れのある島で活動できたことはとても嬉しく、参加してよかったと心から思える経験だった。





ちやたん  
北谷町美浜

公益財団法人 **みらいファンド沖縄・琉球宇温基金**

〒901-2102 沖縄県浦添市前田 1-6-24 トミハウス 1 階

TEL 098-963-7969

<https://miraifund.org/kikin/takaharu/>



<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>

